

筑波大学所蔵 狩野探幽筆《野外奏楽・猿曳図》屏風 調査報告書

(調査) 伊藤 たまき 中根 恭子 渡邊 晃

(本文) 伊藤 たまき

(図版) 渡邊 晃

はじめに

本稿は、筑波大学が所蔵する狩野探幽筆《野外奏楽・猿曳図》屏風(挿図1、2)についての調査報告書である。本作は平成十二年(二〇〇〇)に筑波大学附属図書館にて、狩野尚信筆《李白観瀑・剡溪訪戴図》、田村直翁筆《架鷹図》の両屏風とともにその存在が確認された。しかしこれら三点とも発見当時、共箱などはすで失われており、どのような経緯で、またなぜ筑波大学に伝来したのか、その来歴は明らかではない。ただ、探幽・尚信の両屏風については、図書館の備忘メモにより、昭和一八年(一九四三)以前には本学にあったことが指摘されている(1)。さらに表装の形式が統一されていることから、この二点に関しては、依頼者や収蔵者が同じで、同時に本学に持ち込まれた可能性が考えられる。

本屏風の制作者である狩野探幽(一六〇二―一七四)は、一六歳で幕府御用絵師となり、以後、徳川家と縁の深い寺社や城郭の障壁画を次々と手掛け、江戸の幕藩体制における御用絵師としての狩野派の礎を築いた画家である。彼が創出した、余白を生かした幾何学的な画面構成、瀟洒で淡白な筆致は、前代の豪放華麗な様式とは全く異なる絵画空間を提示し、その新様式は江戸絵画に多大な影響を及ぼした。

本作には、そうした探幽様式の特徴が随所に見られ、おそらくは壮年期の制作と考えられている。右隻には、楽器を奏し、舞い踊る人物と子供を抱いた婦人が描かれている。左隻には画面中央(第三、四扇)に猿曳をおき、そのまわりにたのしげに集う見物人が配されている。本作の画題に関しては、それを示唆する資料が皆無なため、便宜的に「野外奏楽・猿曳図」のタイトルがつけられた(2)。楽器を奏する人物や猿曳の図自体はいくつかの先例があり、琴棋書画図の中などに見ることができる(3)。本作は、探幽がそれら

過去の作例からモチーフの切り離しや再構成を行い、新たな画題を生み出したものと推測される。そうした画題の点から見ても、本作は非常に興味深く、探幽の画業の一端を示す重要な作品であるといえる。なおこのような本作の画題や図様の問題に関しては、横島菜穂子「筑波大学附属図書館所蔵『野外奏楽・猿曳図屏風』の図様について」を参照されたい。ここでは、来歴や図様に関する論及等は控え、本作の現状について記すにとどめる。

本作の概要

作品名 野外奏楽・猿曳図

作者名 狩野探幽

制作年代 江戸時代初期（一六五一—一六〇年。斎書き時代）

所有者 筑波大学

材質形状 紙本水墨。紙継（三枚）。六曲一双

内寸

右隻 一五〇・八×三四八・〇cm 左隻 一五〇・八×三四八・〇cm

外寸

右隻 一六九・四×三六六・七cm 左隻 一六九・八×三六六・六cm

右隻右端・左隻左端の上部に落款あり

墨書「探幽斎筆」 朱文円印「法眼探幽」（挿図9、10）

共箱はなし

現状について

本作の保存状態は、本画・表装部とも良好とはいえない。本画部分では、右左隻とも画面全体にわたって虫食い・剥落が多数見られる。虫害は右隻・左隻ともに画面上部に集中している。また扇と扇の境目が黒ずみ、ここに特に大小の剥落が多く見受けられる。右隻の第五・六扇、左隻の第五・六扇の

ように、こうした剥落部分のいくつかには、その上を墨で塗ったような痕跡があり、また全扇にわたって墨によるものと思われる汚れや黒ずみも見受けられる（挿図5、8）（4）。さらにひびやキズ、本紙が浮いてしまっているところやはがれかかっている部分も多々あり、これが今後剥落し、描画部分に深刻な被害をもたらす可能性がある。実際、現状ですでに右隻第三扇中の琴を弾く人物の顔が欠失してしまっている。猿曳の老人の描画部分（左隻第二扇）にも数箇所の大きなキズが見られ、将来図様が損なわれてしまう危険性がある。

さらに右左隻とも、水が流れたあとと思われるしみや浸水のあとと思われるしみがある（挿図3—8）。前者は画面上部に集中しており、右隻・左隻のほぼ全扇に見られる。後者は右隻の第一・二扇の下部、左隻の第一・二扇の下部にある。同様のしみは、本作とともに新出した《架鷹図》（田村直翁筆）にも認められる。探幽屏風のしみは《架鷹図》に比べひどくはないが、このことから、これらの屏風絵が同じ所有者のもとで水害を受けた可能性が考えられる。

表装部について

本屏風は、筑波大学附属図書館において、ともに新出した狩野尚信筆《李白観瀑・剡溪訪戴図》と同じ表装がされている。縁木には花文が施された飾り金具が使われており、裏側には青い絹布（？）がはられている。ただし、縁及び縁と本紙の間に用いられている裂が尚信屏風とは若干異なっており、探幽屏風が金地に金（？）で雲文（？）、縁と本紙の間には紫地（金地？）に雲文（？）であるのに対し、尚信のものでは、金地に赤（？）で唐草文、紫

地（金地？）に唐草文の錦があてられている。

表装部も傷みが見られる。右隻では、第一扇の裏側に五箇所、第六扇には四箇所の陥没が見られ、ともに下部に集中している。左隻でも、やはり第一扇に一箇所、第六扇に二箇所の陥没（ともに下部）がある。また裏側を覆う布は右左隻ともに退色・劣化がすすみ、左隻第六扇ではほとんど取れかかっている。また表側では、左隻第六扇の縁（下部）の布が浮いてしまっている。

（付記）

本稿は、平成一四年（二〇〇二）三月発行の『筑波大学附属図書館所蔵狩野探幽等江戸前期屏風の研究』（筑波大学芸術学系守屋研究室）に掲載したものに、加筆修正を加え、再録したものである。

注

（1）守屋正彦「歴聖大儒像と探幽・尚信の新出屏風について」『筑波大学附属図書館所蔵 日本美術の名品―石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像―』筑波大学附属図書館 二〇〇〇年 一七頁。

（2）前掲書註1。一八頁。

（3）例えば永青文庫所蔵の伝雪舟筆『琴棋書画図』には、猿曳をはじめ、楽団や母子、鶏などが描かれており、描かれたモチーフ、さらには部分的な構図や姿形など、本屏風に共通する点が多いという。また、これら複数の源泉から、探幽がモチーフの再構成を行い、新たな画題を生み出していった可能性が指摘されている。

前掲書註1。横島菜穂子「狩野探幽筆『野外奏楽・猿曳図』作品解説 三〇―三一頁。

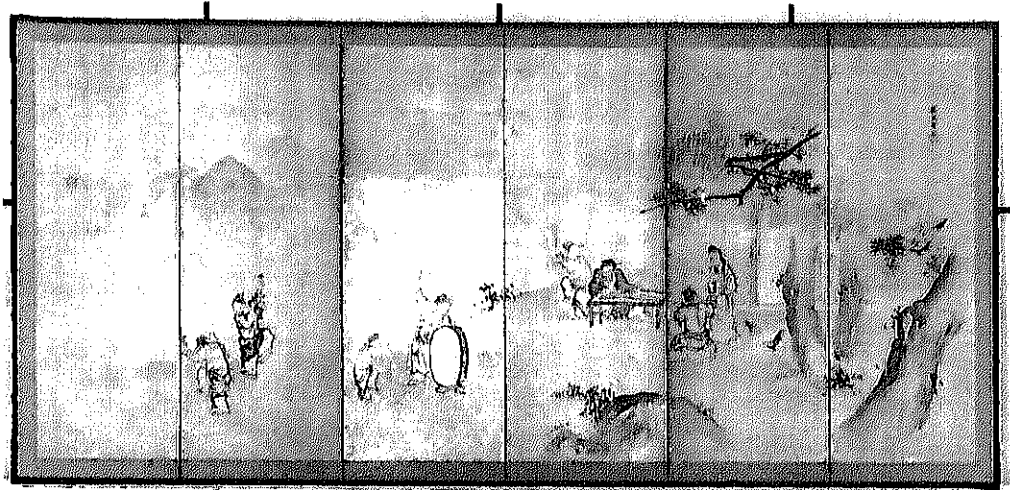
（4）本屏風にはしみが多数あり、過去に水害を受けたことが推測される。従って画面の黒ずみのいくつか、特に扇と扇の間などは、カビによる可能性が高い。だが、右隻の第六扇のように、剥落箇所に見られる黒ずみは、墨によるものと思われる。こうした剥落箇所を墨で塗った痕跡は、特に直翁筆の屏風に顕著に見られ、こちらにはさらに、その際についたと思われる墨点や汚れが、画面及び表装部に点在している。このことから、水害等により、これら屏風がダメージを受けたあと、大まかな修理が行われ、その際に加筆された可能性も考えられる。

参考文献

- 守屋正彦「歴聖大儒像と探幽・尚信の新出屏風について」『筑波大学附属図書館所蔵 日本美術の名品―石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像―』筑波大学附属図書館 二〇〇〇年。一六―一八頁。
- 横島菜穂子「狩野探幽筆『野外奏楽・猿曳図』作品解説」『筑波大学附属図書館所蔵 日本美術の名品―石山寺一切経、狩野探幽・尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像―』筑波大学附属図書館 二〇〇〇年。三〇―三一頁。
- 横島菜穂子「筑波大学附属図書館所蔵『野外奏楽・猿曳図』屏風の図様について」『筑波大学附属図書館所蔵 狩野探幽筆『野外奏楽・猿曳図屏風』の図様についてその2』本書に収録。

図版

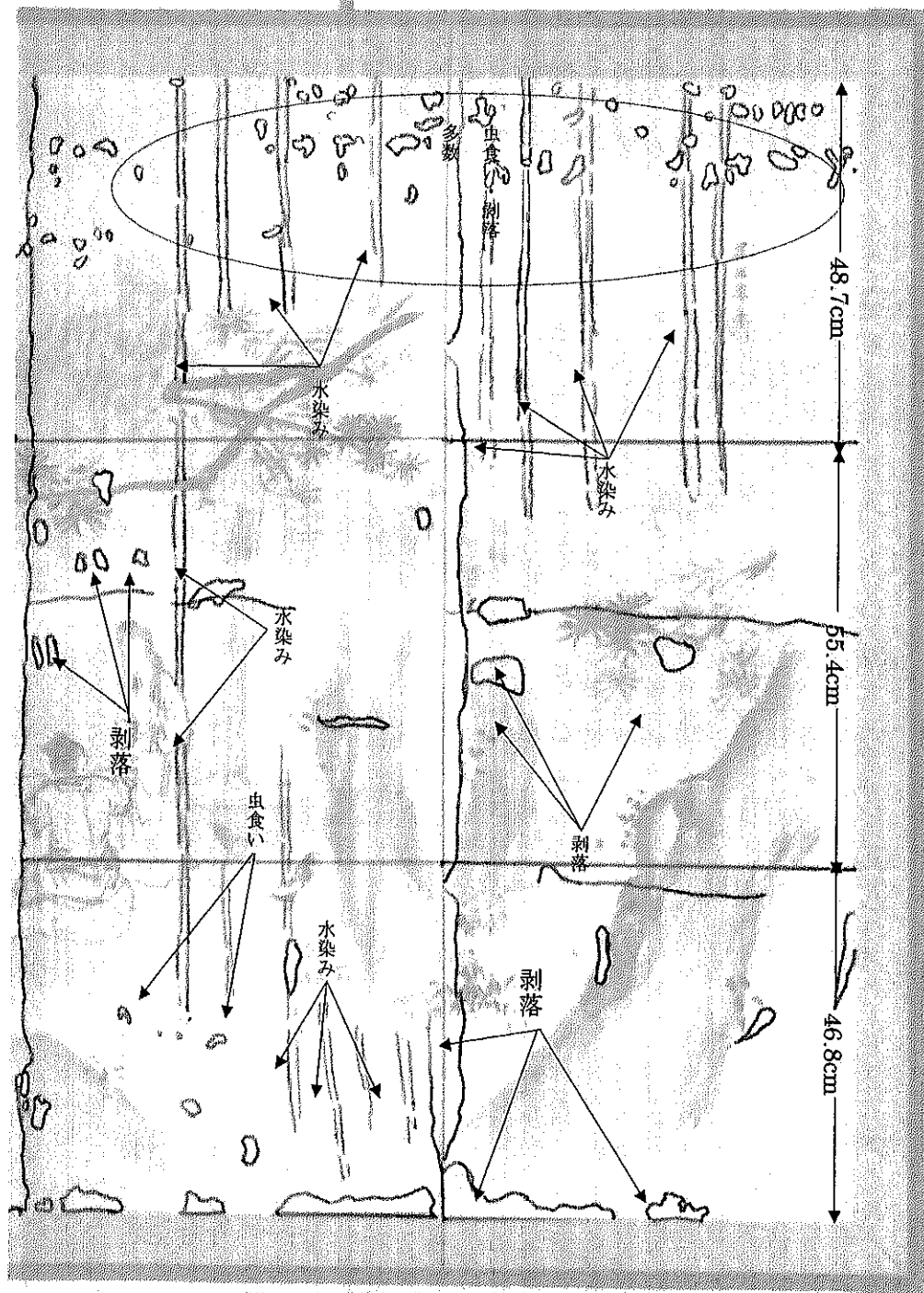
挿図1 狩野探幽筆《軒外奏楽図》(右隻)



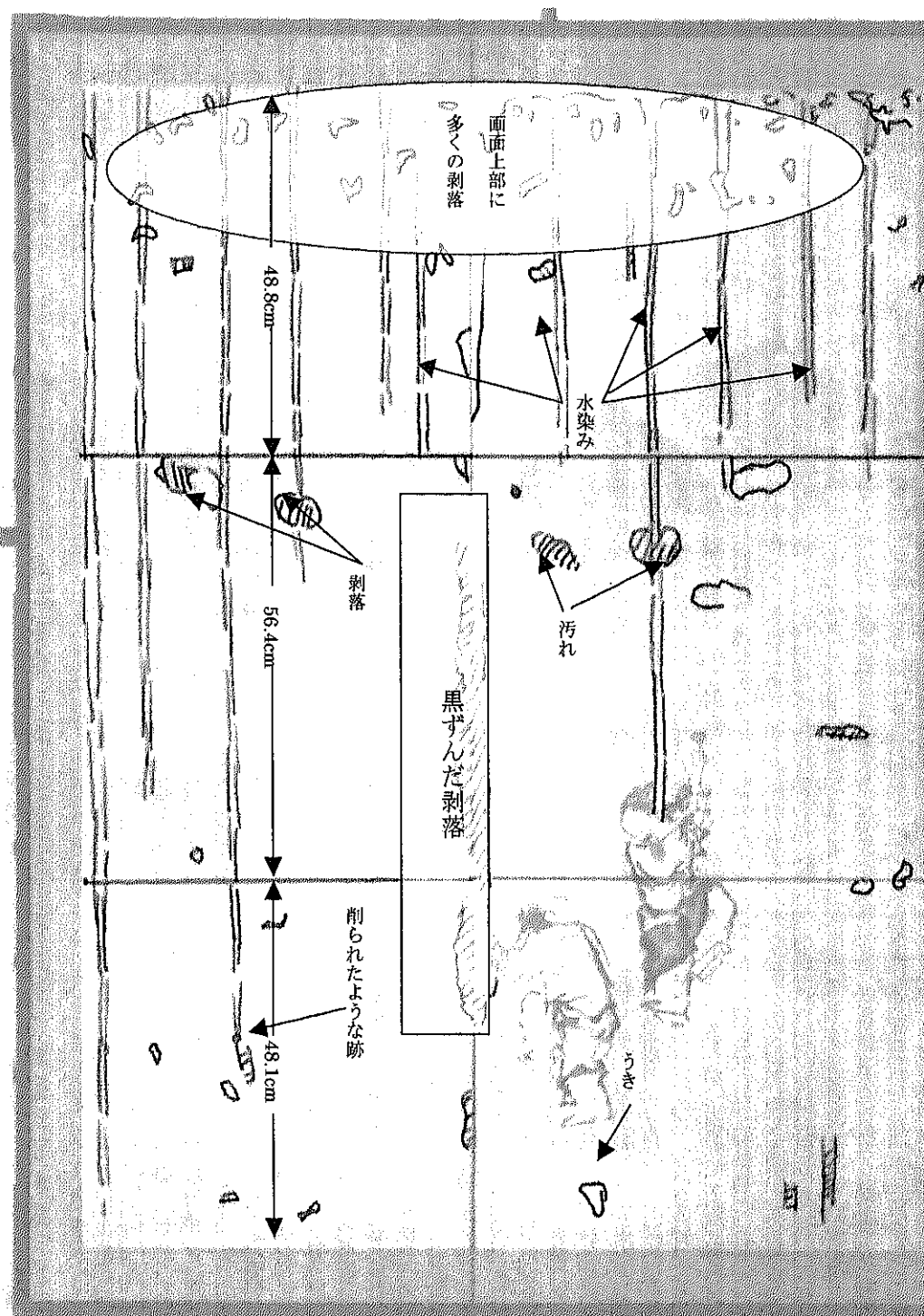
挿図2 《猿蓑図》(左隻)



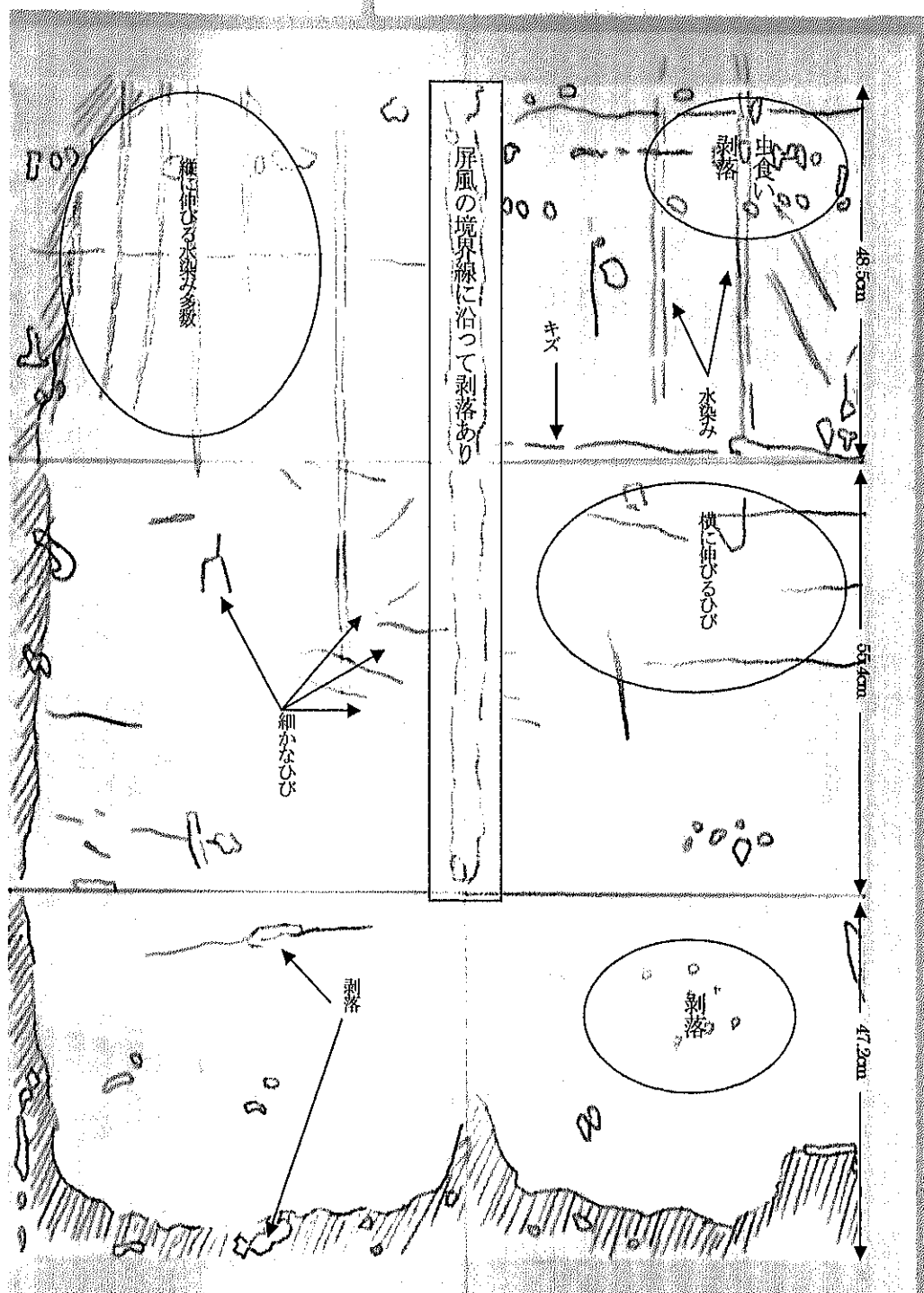
插图 3 《野外奏楽図》 一、二扇目 画面状況



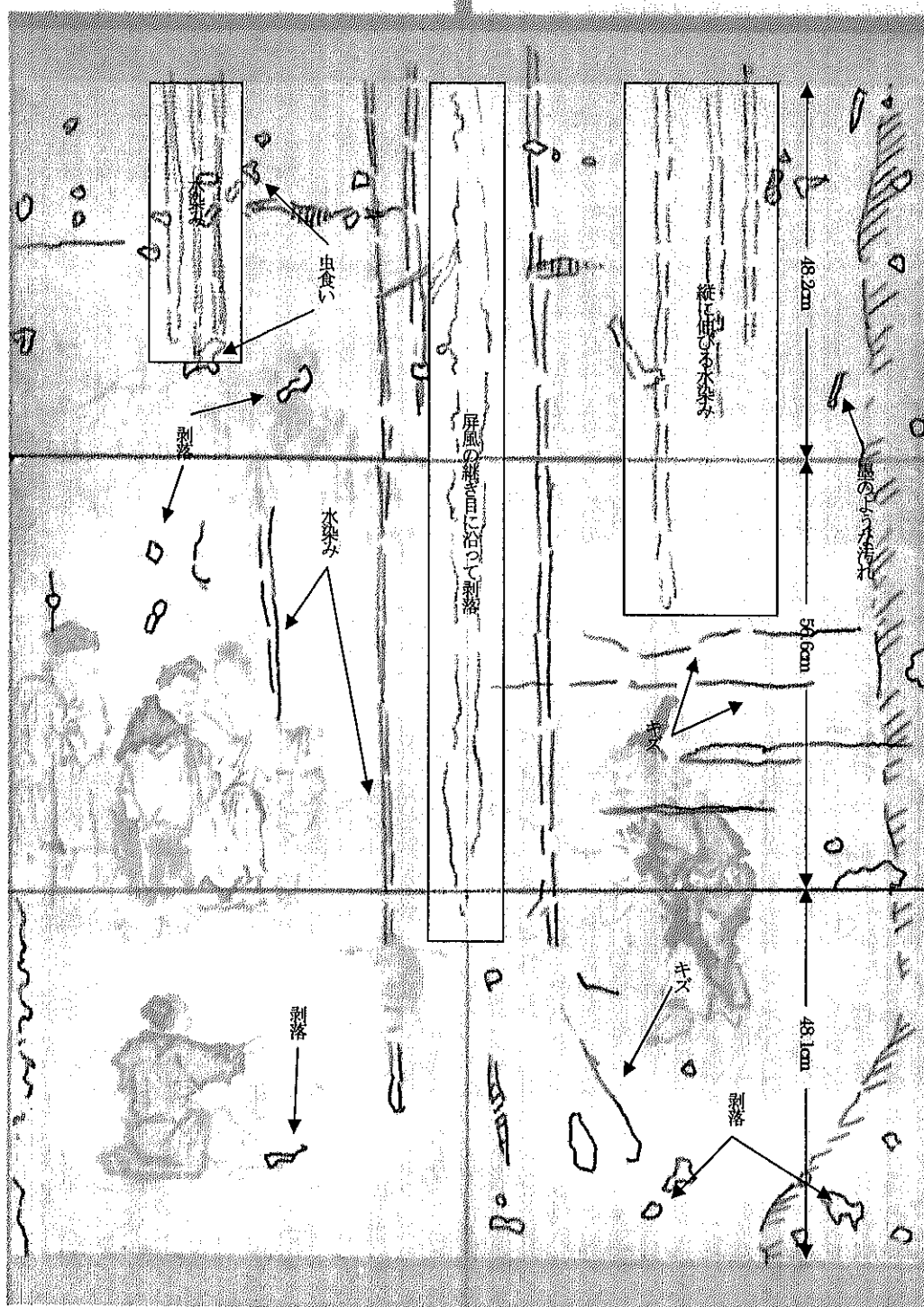
挿図5 《野外奏楽図》 五、六扇目 画面状況



挿図6 《猿屯》 一、二層目 画面状況



挿図7 《猿電図》 三、四扇目 画面状況



挿図8 《猿曳図》 五、六扇目 画面状況

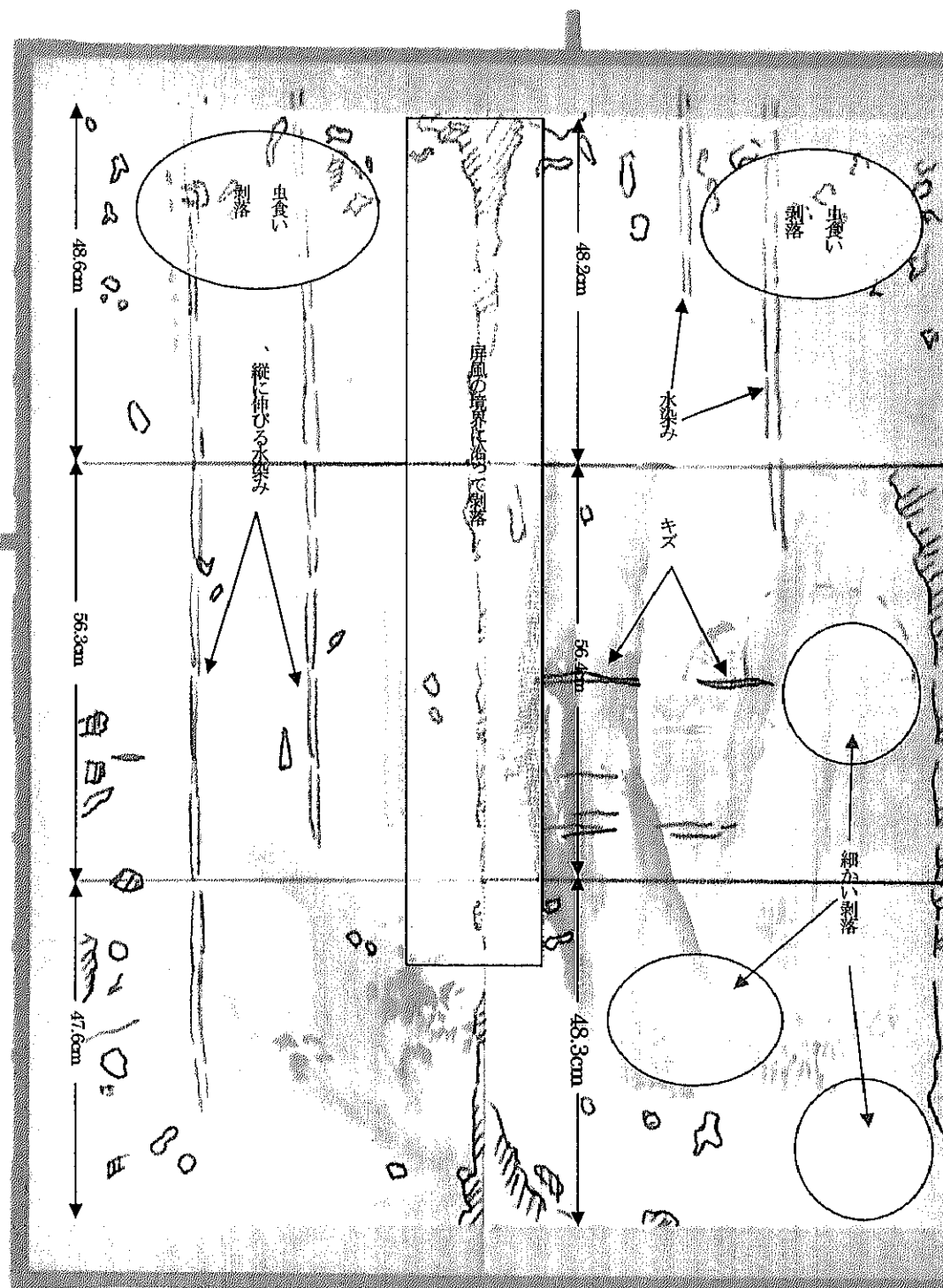


插图9 《野史奏图》落款

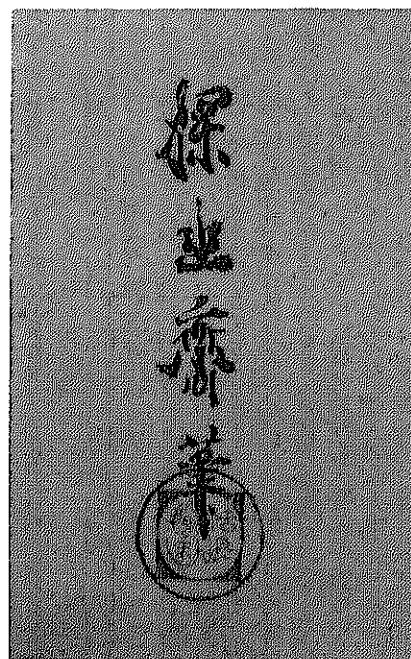


插图10 《猿图》落款

